都市文化研究　Studies in Urban Cultures
Vol. 13，46-56頁，2011

◇研究ノート◇

五世ジェブツンダンバの円寂とその エルデニ・シャンゾドバの動き

八　　宝

◆要　旨

従来，五世ジェブツンダンバ・ホトクトの円寂とその後のエルデニ・シャンゾドバナワンチョインピルの動き，とりわけ六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをハルハ・モンゴルの地で転生させようと計画的，冒険的な行動をしたことに関して研究がなされてこなかった。本論は，主に中国第一歴史档案館に所蔵する清代の軍機処マンジュ語録副档冊の档案文書を用いて，ナワンチョインピルの大胆な行動の背景，経過，目的などを検討し，清朝とハルハ・モンゴル側がジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンの転生地をめぐって対立して来たことの歴史的経緯を明らかにしようとするものである。

キーワード：円寂，ナワンチョインピル，ホビルガン，転生地，大胆な行動

（2010年9月17日論文受理，2010年11月5日採録決定 『都市文化研究』編集委員会）

はじめに

道光19～20（1839～1840）年の間に起きた五世ジェブツンダンバ・ホトクトと理藩院官吏たちの争いは，前者の勝訴で終結した。このことは勝訴者となった彼らにとって良い経験になったばかりではなく，大きな自信が付いたと思われる。おそらく，この経験や自信があってこそ，翌年に，エルデニ・シャンゾドバのナワンチョインピル（那旺吹木培勒）が六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガン（qobilvan，化身，転生者）を再度モンゴルで転生させようという清朝の規定に違反する大胆な行動に出たと考えられる[1)]。

道光21（1841）年4月，五世ジェブツンダンバ・ホトクトは同じゲルク派の第二の大ラマ，パンチェン・エルデニから仏典を習い，仏教の教養を一層深めるため，再度チベットへ旅立つ申請を朝廷に提出し，許可された[2)]。しかし，ハルハ・モンゴルを出発し，チベットへ向かう途中，青海南部の木魯烏蘇という地に着いた時，突然病気で倒れ，円寂した。これまでジェブツンダンバ・ホトクトが円寂すると，その遺骨は庫倫のいくつかの寺院のどこかに龕座（遺骨をおさめる形）される伝統が守られてきた。一世・四世の遺骨は慶寧寺に，二世の遺骨は勅愿寺に，三世の遺骨は甘丹寺にそれぞれ龕座された[3)]。今度も五世ジェブツンダンバ・ホトクトが旅の途中，他郷で円寂したという事情があったが，やはりその遺骨を庫倫へ運び龕座しなければならなかった。そこで，同行のエルデニ・シャンゾドバであるナワンチョインピルが，ザサグタイジ（台吉）・ツェレンドルジ，ラブダンドルジ，ツワンジャブらの一部の人々と共に師匠五世ジェブツンダンバ・ホトクトの遺骨を運び，モンゴルへ帰ることにし，同ホトクトの叔父であるハンブ（堪布）・ラマの伊喜格勒克ら一部の人々はチベットへの旅を続け，ラサへ行き，亡きホトクトの冥福を祈る「熬茶」をすることにした。

五世ジェブツンダンバ・ホトクトの遺骨を運んだナワンチョインピルら一行は，道光22年正月18日，庫倫に到着した。その後，ナワンチョインピルは，本職のエルデニ・シャンゾドバの仕事を続けたほか，師匠の貴重な遺物である金冊金印などを保管する任務も与えられた。

チベット・モンゴル仏教のホトクト転生制度では，現世のホトクトが円寂すると次世ホトクトのホビルガンを転生させなければならないという問題に直面する。ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンの転生も例外ではないが，その転生地をめぐって清朝とハルハ・モンゴル側（ジェブツンダンバ・ホトクトとそれを支える立場にある王公，僧侶たち）が対立し合って来た。ホビルガン

の転生地がホビルガンの出自に繋がり，ホビルガンの出自が政治，権力と連動していたからである。そもそもチベット仏教がハルハ・モンゴルへ流布することに伴い，ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンは，初めてトシェート・ハン家に転生し，その系統を形成したわけである。一世・二世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンはともにこのトシェート・ハン家の出自であった。そのようなトシェート・ハン家とジェブツンダンバ・ホトクトの出自を切り離すため，乾隆帝が強く干渉し，三世のホビルガンをチベットの地で転生させた。それ以来，ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンはチベットで転生するようになり，それは規定，慣例となった。しかし，清朝のこの規定，慣例にハルハ・モンゴル側は根底から反対の態度を取り続けた（詳細は後述）。本論で取り扱うエルデニ・シャンゾドバたるナワンチョインピルの大胆な行動がその一つの好例であった。

五世ジェブツンダンバ・ホトクトが円寂した後，庫倫辦事大臣は，清朝の規定，慣例に従い，六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをチベットの地で尋訪するため，達ラマ（ラマ官，寺院のラマの官位）・ロブサンツレテムらをチベットへ派遣した。しかし，達ラマ・ロブサンツレテムらが，チベットからモンゴルへ帰る前にナワンチョインピルは，道光22（1842）年4月頃から，六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをハルハ・モンゴルの地で転生させようと，大胆な行動をした。のち，庫倫辦事大臣デレグドルジがナワンチョインピルを訊問した時の供述によると，ナワンチョインピルの大胆な行動の計画は，五世ジェブツンダンバ・ホトクトが木魯烏蘇で円寂した直後，ラサへ行った伊喜格勒克に，チベットの高僧たちから次世ホトクトのホビルガンの転生地のヒントを教えてもらうよう頼んだ時から始まっていたことが判明した。五世ジェブツンダンバ・ホトクトと一緒に行動をし，時には五世ジェブツンダンバ・ホトクトの代表として，事務を処理していたエルデニ・シャンゾドバであるナワンチョインピルは，清朝の規定，慣例をよく承知していたにもかかわらず，六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをハルハ・モンゴルで転生させようとしたのである。

こうした道光期（1821-1850）の清朝とジェブツンダンバ・ホトクトの関係の正常（国の安定を脅かす大事件や混乱が起こらなかったこと）でありながらの，対立，衝突を政治史の観点からの研究が非常にすくない。とくに，五世ジェブツンダンバ・ホトクトの円寂とその後のエルデニ・シャンゾドバ，ナワンチョインピルの動き，とりわけ六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをハルハ・モンゴルの地で転生させようと計画的，冒険的な行動をしたことに関して，研究はなされてこなかった。同じハルハ・モンゴルでも，庫倫辦事大臣デレグドルジとウリヤスタイ参賛大臣ツェレンドルジらが，清朝政府側の立場に立っていたに対し，エルデニ・シャンゾドバ，ナワンチョインピルらはハルハ・モンゴル側の立場に立ち，正反対の行動をしていた。このように，清朝政府の立場にあった庫倫辦事大臣デレグドルジとウリヤスタイ参賛大臣ツレンドルジの両大臣が，ナワンチョインピルの行動を告発してから弾劾，訊問した档案文書が，中国第一歴史档案館に所蔵する清代の軍機処マンジュ語録副档冊の中に見出された。本論は，主にこの档案文書を用いて，ナワンチョインピルの大胆な行動の背景，経過，目的などを検討し，清朝とハルハ・モンゴル側がジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンの転生地をめぐって対立して来たことのもっとも典型的な事例と見て，そこから清朝とジェブツンダンバ・ホトクト政治関係の一面を明らかにしようとするものである。

一，五世ジェブツンダンバ・ホトクトの円寂

五世ジェブツンダンバ・ホトクトはチベットへ旅立ち，道光21年10月1日，青海の南部の木魯烏蘇に着いた時，病気で円寂した。このことに関して，当時の駐蔵大臣ファフォギンは，道光21年11月4日，以下のように上奏した。

「哲卜尊丹巴呼圖克圖圓寂摺」

為奏聞事。

奴才等於本年十月十九日接得哲卜尊丹巴呼圖克圖遣人具呈。内呈哲卜尊丹巴呼圖克圖赴藏聽傳旺極囊等根本經典，於十月初一日行之木魯烏蘇地方，中風嘔吐，身體氣息軟弱，染病沉重，實屬不能支持。現在正值寒冷之時，水土又不服，兼之草地皆有郭羅克番子惡賊搶奪，實在可懼。此時不知所向，故遣人趕緊赴藏呈報駐藏大臣等因呈報前來。奴才等隨即行文噶爾丹錫勒圖薩瑪第巴克什，由伊差派頭等臺吉嘉木參窩柱，大堪布嘉木陽丹巴帶領卓尼爾等前往看視病勢，一面沿途妥為照料來藏，令伊等去訖。隨於十月十九日接據噶爾丹錫勒圖薩瑪第巴克什來文：哲卜尊丹巴呼圖克圖於十月二十九日在木魯烏蘇地方因病圓寂。該呼圖克圖之叔，堪布伊喜格勒克等由彼起程來藏，代為熬茶念經。再該呼圖克圖骨殖，系原隨從額爾德尼商卓特巴那旺吹木批勒等，已經照料搬移回歸庫倫等因，呈報前來。今將哲卜尊丹巴呼圖克圖圓寂日期，理合繕摺奏聞，謹奏等因。於道光二十一年十一月初四日具奏[4]。

上記，駐蔵大臣の上奏文から以下のようなことが分かる。

① 道光21年10月1日，五世ジェブツンダンバ・ホ

トクトは，木魯烏蘇に着いた時，そこの天気や水土の急変になれず，また強盗が出没する不安の中，病気にかかり重体となった。

② 五世ジェブツンダンバ・ホトクトは，チベットの駐蔵大臣のところへ使者を送り，救援を求めた。使者が，道光21年10月19日，駐蔵大臣に会い，ホトクトの境遇を伝えた。駐蔵大臣は，チベットのラマ関係の事務担当者であるガルダン・シレート・ホトクトにその事情を知らせた。

③ ガルダン・シレート・ホトクトが，一等タイジ嘉木参窩柱と大ハンブ嘉木陽丹巴，及び卓尼尓（清朝官位の一種）たちで構成した救援隊を早急に木魯烏蘇の地へ派遣したが，道光21年10月29日，五世ジェブツンダンバ・ホトクトは円寂した。

④ 五世ジェブツンダンバ・ホトクトと同行していた叔父兼ハンブである伊喜格勒克ら一部の人々が，木魯烏蘇の地を出発し，チベットへの旅を続け，ラサへ行き，亡きホトクトの冥福を祈る「熬茶」をすることにした。

⑤ 五世ジェブツンダンバ・ホトクトと共に旅をしていたエルデニ・シャンゾドバのナワンチョインピルは，残る一部の人員と一緒に師匠の遺骨を運び，モンゴルの郷へ帰った。

同年11月22日，道光帝は，駐蔵大臣と庫倫辦事大臣に次のような指示を下した。

> 同年11月22日諭旨を下した。ファフォギン（マンジュ語の名前）の処からジェブツンダンバ・ホトクトは，モリス河（木魯烏蘇）という地で円寂したことを上奏した。ジェブツンダンバ・ホトクトがパンチェン・エルデニからワン・ジノン（旺極囊）等の基本経典の伝授を受けるためチベットへ行き，突然病気で円寂したのは大変悲しい，私（朕）は心より大いに恩賜する。恩賞を与え，黄色いハダグ，数珠，オチル，ホンホー一個ずつ賞するので，ファフォギンに渡して，霊柩の前に供品にし，乳茶を献上させる。ホトクトの霊柩が北帰する時，ファフォギンは，官兵を派遣して，途上の世話をする。境界（チベット）を出て，モンゴル草原に到達した後，すぐにツェレンサンルブ公らに交付し，よく世話をしながら北の故郷へ帰させること。デルグドルジは，庫倫から離れた至近のいくつかの駅站まで行って迎えるべきである。同ホトクトの霊柩が庫倫に到着した際，ナスンバトが駅站に行って出迎える。また如何にボイン（冥福を祈ること）を行って賞するか，そして如何にモンゴル草原のオラー（駅站）に接続させることを理藩院が，早急に議論して上奏しなければならない[5]。

エルデニ・シャンゾドバ，ナワンチョインピルらは，五世ジェブツンダンバ・ホトクトの霊柩を運び，清朝政府の保護，世話を受けながら，道光22年正月18日，無事庫倫に到着した。五世ジェブツンダンバ・ホトクトの遺骨の扱い方，及びその大事な遺物である金冊金印を保管する件に関して，デルグドルジが庫倫辦事大臣としての考え，配置等をまとめ，皇帝に報告した。それは即ち「五世ジェブツンダンバ・ホトクトの霊柩が庫倫に運ばれた件に関する庫倫辦事大臣デルグドルジの奏摺」[6]である。その内容は次のようなものである。

① 庫倫辦事大臣デルグドルジは，上諭に従い，庫倫から三つの駅站が離れたところまで行って，ホトクトの霊柩を出迎え，そこでハルハ・モンゴルの王公，ラマたちとともに霊柩に供品を捧げ，冥福を祈った。また，駅站を恩賞として利用させ，官兵を出し，世話をしてくれた皇帝・政府の恩賜に感謝の意を表し，皇帝が住む北京の東方へ向かって合掌，叩頭した。

② 庫倫の寺院の敷地の中に臨時モンゴルゲルを建て，そこでホトクトの霊柩を安置し，祀ることにし，将来遺骨を収納する塔が竣工すれば，そこにホトクトの遺骨を移して永久に龕座する。

③ 六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンが，転生，坐床するまでの間，五世ジェブツンダンバ・ホトクトの遺物の金冊金印などをそのエルデニ・シャンゾドバのナワンチョインピルに渡して，慎重に管理させる。

④ 五世ジェブツンダンバ・ホトクトのチベット人経師ノムン・ハンのロブサンザミヤンが病気になったため，一旦チベットへ帰らせ，彼の仕事をもう一人のハンブ・ノムン・ハンであるドルジとエルデニ・シャンゾドバたるナワンチョインピルらに分担させる。

庫倫辦事大臣デルグドルジの上奏内容をみると，五世ジェブツンダンバ・ホトクトの霊柩が庫倫に運ばれた時点で，ナワンチョインピルが木魯烏蘇で企てた計画はまだ発覚されていないことが分かる。庫倫辦事大臣に信頼され，師匠の大事な遺物金冊金印の保管や休暇を取ったロブサンザミヤンの仕事までも任されていたのはその表れである。おそらく，ロブサンザミヤンの不在は，ナワンチョインピルらの大胆な行動の実行に有利になったと考えられる。

二，ナワンチョインピルとエルデニ・シャンゾドバ職

ナワンチョインピルは，道光18（1838）年から五世ジェブツンダンバ・ホトクトのエルデニ・シャンゾドバ職を務めた[7]。在任中，道光19（1839）年，五世ジェブツンダンバ・ホトクトが道光帝に拝謁するため，北京へ

赴いた際，同行した。そして，北京に滞在中の間，理藩院の官吏たちによる複数の不正操作案に遭遇し，師匠や同僚のラマたちと一緒に，積極的，かつ巧妙的に争って，勝訴した経験を持つ人物である[8]。また，前節で触れたように，道光21（1841）年，五世ジェブツンダンバ・ホトクトが最後のチベットへの旅をした時に同行し，ホトクトが木魯烏蘇で円寂するとその遺骨を運びモンゴルへ帰った。その後，エルデニ・シャンゾドバの仕事を続けたが，六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをハルハ・モンゴルで転生させるという大胆な活動をし，清朝によって免職処分を受けるに至った[9]。

ナワンチョインピルの大胆な行動は，実にその務めていたエルデニ・シャンゾドバ職の役割，性質と深い関係があったので，ここで，エルデニ・シャンゾドバとは一体どういう職務であって，清朝としては，いつ，いかなる目的でこの職務をジェブツンダンバ・ホトクトのもとに設置したのか，そして実際に，エルデニ・シャンゾドバは，清朝とジェブツンダンバ・ホトクトの間で，どのような役割を演じてきたのか述べておこう。

シャンゾドバ（šangjudba 商卓特巴）[10]は，チベットとモンゴルの仏教寺院にともに設けられた職であるが，その地位や役割は異なっていた。元来，チベット仏教寺院におけるシャンゾドバ職は一般庶務管理者であり，その地位はあまり高くはない[11]。これに対して，モンゴルのシャンゾドバは次のような歴史的経緯により高い身分を獲得することになる。順治8（1651）年に，一世ジェブツンダンバ・ホトクト[12]がチベットでの修業を終わらせ，モンゴルへ帰る時，寺院の建設や運営に必要な専門僧侶50人ぐらいを連れてきた。そのなかに，シャンゾドバ職の人がいた[13]が，彼はモンゴルにおいても，チベットの場合と同じくおそらく一般庶務管理者として仕えたと考えられる。のちに，清朝がシャンゾドバをエルデニ・シャンゾドバと改称し，ハルハ・モンゴルのジェブツンダンバ・ホトクトのもとに正式に設置したことによって，その地位が上昇し，ジェブツンダンバ・ホトクトに次ぐ地位となり，寺院の行政やシャビナル（šabinar 沙畢納爾，属民）を管理するラマ官位になった[14]。道光年間になると，エルデニ・シャンゾドバ職の地位はさらに上昇し，ハルハ・モンゴルの盟長と同格とされ，庫倫辦事大臣[15]や理藩院と直接文書を往来させることが出来るようになった[16]。

清朝のエルデニ・シャンゾドバの衙門は，庫倫のマイダリ（邁達里）寺院の北側に位置し，四つの部門（四邸）から構成されていた。第一邸は，シャビナルの管理所，第二邸は庫倫とジェブツンダンバ・ホトクトの庶務局，第三邸はエルデニ・シャンゾドバ本人の事務所，第四邸は財務・会計局である[17]。

ポズドネエフは，清朝が乾隆19（1754）年に，セチェン・トイン（トインは貴族出身の僧侶のこと）のルンデブドルジ（スンデブドルジ）をエルデニ・シャンゾドバに任命したことに基づいて，同年に，清朝はジェブツンダンバ・ホトクトのところにエルデニ・シャンゾドバ職を創設したとする[18]。しかし，『大清会典事例』の記載をみる限りそうではないことが判明する。『大清会典事例』巻974，「理藩院・喇嘛封號」に

> （雍正元年）又議准，多爾濟旺楚克，給以掌管哲布尊丹巴呼圖克圖徒衆，辦理庫倫事務額爾德尼商卓特巴之號；堪布諾們汗，給以掌管哲布尊丹巴呼圖克圖經壇，總理喇嘛事務堪布諾們汗之號，各給予敕印[19]。

とある。

この記載から，清朝が，雍正元（1723）年に，ジェブツンダンバ・ホトクトのもとにエルデニ・シャンゾドバ職を創設したことは明らかであり，ドルジワンツォグ（多爾濟旺楚克）が初代エルデニ・シャンゾドバに就任したことが分かる。その後，清朝が崩壊するまで，エルデニ・シャンゾドバ職が置かれ，15名の高い位置にあるラマたちがその職を務めた（歴代エルデニ・シャンゾドバ表を参照）。

清朝が，ジェブツンダンバ・ホトクトのもとにエルデニ・シャンゾドバ職を設置した目的について，ポズドネエフは，清朝が二世ジェブツンダンバ・ホトクトに不信感を持つようになってから，彼を監督，制限するためにエルデニ・シャンゾドバなどの職を創設した[20]とする。李毓澍もほぼ同じ見解を示した[21]。しかし，李毓澍の見解は趙雲田によって批判されている。趙は，乾隆20（1755）年までは，清朝と二世ジェブツンダンバ・ホトクトがよい関係にあったので，乾隆帝が二世ジェブツンダンバ・ホトクトに不信感を持ったはずがない，清朝がジェブツンダンバ・ホトクトのもとにエルデニ・シャンゾドバを設置したのは，ジェブツンダンバ・ホトクトに協力し，ハルハ・モンゴルの仏教（ゲルク派）管理を強化するためであったと強調する[22]。趙雲田の観点は，エルデニ・シャンゾドバ職を設置した当初の理由付けとして，適切であるといえよう。

一世と二世ジェブツンダンバ・ホトクトが同じトシェート・ハン家に転生した関係で，この家の出自の者がエルデニ・シャンゾドバに就任することが多かった。僧侶の地位，寺院での順位から言うと，ジェブツンダンバ・ホトクトとエルデニ・シャンゾドは，上級と下級の関係にあり，ジェブツンダンバ・ホトクトの管轄する幾つかの寺院やその大勢のシャビナルを全体的に管理するのがこのエルデニ・シャンゾドであった。その意味では，清朝がエルデニ・シャンゾドバ職を設置した目的は達成されたと言える。しかし，実際の運営のなかで，ジェブツンダンバ・ホトクトとエルデニ・シャンゾドバの利益，立場とは基本的に合致していくのである。このため，清朝

歴代エルデニ・シャンゾドバ表

氏名	就任の年	ラマの職位
ドルジワンツォク	雍正元（1723）年	不明
ポンツクヤレムピル	乾隆8（1743）年	ザイサン
スンデブドルジ	乾隆19（1754）年	ボイブリチ
ゴンブドルジ	乾隆29（1764）年	ドニル
カラムツェレン	乾隆30（1765）年	ゲブヘイ
デムチェイラブジェイ	乾隆35（1770）年	ドニル
ロブサンゴンツォグ	嘉慶12（1807）年	ソイボン
ロブサンダシ	道光16（1836）年	達ラマ
ナワンチョインピル	道光18（1838）年	達ラマ
ロブサンツルデム	道光24（1844）年	達ラマ
ナムジルドルジ	道光30（1850）年	達ラマ
ロブサンバラジュル	咸豊8（1858）年	達ラマ
ツデンドルジ	同治元（1862）年	達ラマ
ソナムドルジ	光緒11（1885）年	ザイサン
ダシドルジ	光緒12（1886）年	達ラマ
バダマドルジ	光緒22（1896）年	不明

表は包銀海校・注『ジェブツンダンバ伝』を参考に作成

とハルハ・モンゴル側が対立した時（とくに転生地をめぐって），エルデニ・シャンゾドバの立場は自然とハルハ・モンゴル側に傾くものとなり，清朝がエルデニ・シャンゾドバ職を設置した当初の目的から離れていったと考えられる。

三，ナワンチョインピルの大胆な行動

上述したように，ナワンチョインピルは，五世ジェブツンダンバ・ホトクトの霊柩を保護して，ハルハ・モンゴルへ帰った後もエルデニ・シャンゾドバの仕事を続け，また，庫倫辦事大臣デルグドルジらから，五世ジェブツンダンバ・ホトクトの大事な遺物の金冊金印を保管することや，病気のためにチベットへ帰ったノムン・ハンロブサンザミヤの仕事をもう一人のカンブ・ノムン・ハンドルジと分担することが命じられた[23]。

しかし，ナワンチョインピルは，上述の仕事や任務に没頭したわけではない。ナワンチョインピルは，清朝の慣例に違反する六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをハルハ・モンゴルで転生させる計画を断行したのである。

ナワンチョインピルの大胆な行動を事前に察知し，皇帝に告発したのは，ウリヤスタイ参賛大臣ツェレンドルジである。彼は，道光22年11月16日に上奏した「烏里雅蘇台参賛大臣ツェレンドルジがエルデニ・シャンゾドバの行為を告発した奏摺」[24]のなかで，次のような内容を報告した。

① 道光22（1842）年4月に下された上諭に従い，庫倫辦事大臣のデルグドルジらが，ダライ・ラマ，パンチェン・エルデニに委ね，六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをチベットの地で尋訪するため，達ラマ・ロブサンツルデムらをチベットへ派遣した。

② しかし，達ラマ，ロブサンツルデムらが，チベットからモンゴルへ帰る前に，エルデニ・シャンゾドバのナワンチョインピルは，ハルハ・モンゴル四アイマグ（盟，部）の長（盟長，部長），副将軍たちに手紙を送り，その手紙の中で，ラマたちが皆，ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをハルハ・モンゴルの地で転生することを望んでいる，そのため，今年，生まれる子の父母の名前，出産予定日を記入した情報を集め，来年に届けてくれるよう願いをした。

③ チベットへ派遣された達ラマ，ロブサンツルデムらが，モンゴルへ帰る前の隙間を利用し，ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをモンゴルで転生させようと勝手に動いたナワンチョインピルの行為は，明らかに諭旨に違反した愚かなものであり，そのまま放置して置くと，不測な事態が起こるかも知れない。全く，我々モンゴル人の考えを撹乱した意外なことである。

④ 天恩を受けて来た我々は，ハルハ・モンゴルで起こっている事件を即時に上奏しなければならない。庫倫辦事大臣らに指示し，ナワンチョインピルの身柄を拘束し，その行動の真相を調べ，厳しく処理，弾劾することによって，勝手に行動をする人々に訓戒を与えるべきである。

上記，参賛大臣ツェレンドルジの奏摺の回答文と見られる道光帝の下した諭旨が清実録に収録されている。『清宣宗実録』巻385，道光22年11月辛未（27日）条には，

又諭，車林多爾済奏参。額爾德尼商卓特巴那旺吹木

玻勒違旨前往喀爾喀地方尋訪呼圖克圖之呼畢勒罕等語，前輩哲布尊丹巴呼圖克圖之呼畢勒罕皆出于西藏，是以尋訪該呼圖克圖之呼畢勒罕，仍著達賴喇嘛班禪額爾德尼由藏尋訪。曾經降旨甚明，該商卓特巴自系深知，而又字寄四部落盟長，令其在喀爾喀地方尋訪呼畢勒罕，其意何居，實屬任性妄為。除将哲布尊丹巴呼圖克圖之呼畢勒罕仍遵前旨由藏尋訪外，所有該額爾德尼商卓特巴那旺吹木玻勒，著交庫倫辦事大臣嚴行查辦[25]。

とある。

道光帝の上諭に従って，今度は，庫倫辦事大臣のデルグドルジが，ナワンチョインピルの身柄を拘束し，訊問した。デルグドルジは，ナワンチョインピルに対して行った訊問の結果を，道光23（1843）年3月，道光帝に上奏した[26]。庫倫辦事大臣デルグドルジの上奏文の前半は，前面に揚げた参賛大臣ツェレンドルジの上奏文の内容とほぼ同じものであり，後半は，ナワンチョインピル，及び彼とともに行動したハンブ・ノムン・ハン，ドルジ，ザサグタイジ・ツェレンドルジ，達ラマ，ロブサンダワらを訊問し，作った「供述」からなるものである。ここで，庫倫辦事大臣デルグドルジの上奏文の後半，つまり訊問の部分だけの内容を抽出し，整理すれば次のようになる。

① 道光22年11月の上諭に従い，庫倫辦事大臣デルグドルジが，所属するエルデニ・シャンゾドバナワンチョインピルらを拘束し，自ら訊問し，「供述」を記録した。

② 昨年，五世ジェブツンダンバ・ホトクトが木魯烏蘇で円寂した後，その叔父であるハンブ・ラマの伊喜格勒克ら一部の人々が，亡きホトクトの冥福を祈るため，木魯烏蘇の地を出発し，ラサへ行くことにした。その時，ナワンチョインピルは，伊喜格勒克に，チベットの高僧たちから次世ホトクトのホビルガンの転生地のヒントを教えてもらうよう指示した。

③ 去年，伊喜格勒克らがモンゴルへ帰り，チベットの多くのラマたちから六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンの転生地のヒントを教えてもらったことを伝えた。そのヒントは，チベット文字で書かれたものであった。某ラマは，ホトクトのホビルガンが衛藏，カンバ，アムド，ハルハ・モンゴル等の地から出る模様であるとした。また，某ラマは，ホトクトのホビルガンがハルハ・モンゴルの地から出るようであると書き，さらにその父母の名前まで書かれたものもあった。

④ ナワンチョインピルは，ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンが早く転生し，叩頭することを望んで，ハルハ・モンゴルの属民の中で，ホビルガンになる福あるよい子が生まれたか否か，また，それを尋訪してよいのか否かについて，四アイマグの長，副将軍たちと相談して見ようと思って，ハンブ・ノムン・ハンドルジ，ザサグツェレンドルジ，達ラマ，ロブサンダワらと連名した書を送ってしまった。曖昧な行動をしたことに反省している。

⑤ 庫倫辦事大臣デルグドルジは，ナワンチョインピルと共に行動した，ハンブ・ノムン・ハン，ドルジ，ザサグツェレンドルジ，達ラマ，ロブサンダワらも訊問した。彼らもみなナワンチョインピルの意思に賛同し，ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをハルハ・モンゴルの地で尋訪してもよいと一時曖昧に連名し，四アイマグの長らに相談の書を送った。全く，無意識のうちに一緒に行動してしまった。

⑥ ナワンチョインピルは，政府の規定，恒例をよく知っており，また，ホトクトのホビルガンをハルハ・モンゴルの地で尋訪しようと四アイマグの長に相談書を送った。諭旨に違反し，勝手に行動したナワンチョインピルをエルデニ・シヤンゾドバの職から辞めさせ，みなに訓戒を示したい。

⑦ ハンブ・ノムン・ハン，ドルジが，ナワンチョインピルの意思に従い，連名書を送ったのが，大間違いであり，ほんとうは，免職すべきである。ただ，ジェブツンダンバ・ホトクトが円寂し，その庫倫のラマ・バンディたちの数が多く，仏事教養のことも大事であるので，同時に二人（ナワンチョインピルとドルジ）を解任すると困る。改めて就任した者は，ジェブツンダンバ・ホトクトの寺院の繁多な集会，法事，及び衆ラマの管理に慣れるまで時間がかかる。ドルジの過失は，意外なものであったため，彼のハンブ・ノムンハンの職をそのまま保留し，49頭の家畜の罰金を支払わせる。

⑧ ジェブツンダンバ・ホトクトのチベット関係事務の担当者であるザサグ（一等）タイジツェレンドルジが，ナワンチョインピルの意思に従い，ともに行動した過失を考慮し，理藩院に交付し，審理させてもらいたい。

⑨ また，連名書を送った達ラマロブサンダワは，六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンの転生のため，チベットへ行き，苦労したので，モンゴルへ帰った時点で，調べたい。

上に挙げた庫倫辦事大臣デルグドルジの上奏文の②と③をみると，ナワンチョインピルと伊喜格勒克の二人は木魯烏蘇の地で別れる前に，ホビルガン転生地のヒントをチベットの高僧から教えてもらうことについて相当時間をかけて話し合って，計画を企てたと思われる。職務のランクが上位にあったナワンチョインピルが伊喜格勒克に指示をし，伊喜格勒克もその指示通り積極的に活動し，たくさんの情報を集めて帰った。伊喜格勒克の持ち帰った情報の特徴は，ホビルガンは，チベット（衛藏，カンバ，アムド）とハルハ・モンゴルの広い範囲に転生する，つまりホビルガンは清朝の規定，慣例の範囲にある地とそれを超えた地にも転生する可能性があると示唆

したことである。また④によると，ナワンチョインピルはハルハ・モンゴルで計画を実際に実施する段階に入ると，ヒントにあったチベット（衛藏，カンバ，アムド）の地，つまり清朝の規定，慣例の範囲にある地を外し，ハルハ・モンゴルの地だけの範囲でホビルガンを尋訪しようとした。さらに⑤⑦⑧⑨にあるように，ナワンチョインピルの大胆な行動に同僚のハンブ・ノムン・ハンドルジ，達ラマ，ロブサンダワ，一等ザサグタイジ，ツェレンドルジらも賛成し，共同で連名書を出したことは，ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをハルハ・モンゴルで転生させるのが，ナワンチョインピル一人ではなく，一定の人々の共有の願望であったことを示していると言えよう。彼らは，連名書を全ハルハ・モンゴル四アイマグの長，副将軍らに送り，彼らの参加を呼び掛けて，共同の力で行動をしようとしたのである。

四，ホビルガン転生地に対する清朝とハルハの認識の相違

本節では，エルデニ・シャンゾドバのナワンチョインピルがなぜ六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをモンゴルで転生させようとしたのかという問題の歴史的経緯を探ってみたい。

本来，チベット仏教におけるいずれかのホトクトのホビルガンは，固定的な一つの地で転生するというものではなく，仏教自体の伝播の必要性，または仏教施主の要望などによって，異国，異民族の間にも転生できるものであった。ジェブツンダンバ・ホトクトの前世は，もともとインド・チベットで転生していたホトクトの系統であった[27]が，16世紀後半からチベットの仏教のハルハ・モンゴルへの伝播の必要性，及びハルハ・モンゴルのアバダイ・ハーンによる「ハルハ・モンゴル中心構想」の構築理念により，チベット仏教がハルハ・モンゴルへ流布して行ったことに伴い，ハルハ・モンゴルで転生し，その系統を形成したものである。そのため，通常ジェブツンダンバ・ホトクトと言えば，ハルハ・モンゴルで転生して以降の諸世を指すようになった。以下，清朝とハルハ・モンゴルがジェブツンダンバ・ホトクトの転生地をめぐって，長年にわたって摩擦してきた経緯を振り返ってみよう。

よく知られているように，一世と二世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンは，ともにハルハ・モンゴルのアバダイ・ハーンの後裔であるトシェート・ハン家に転生した。清朝は，一世と二世ジェブツンダンバ・ホトクトの時代には，懐柔，優遇政策を実施していた。この政策に恵まれ，また二代ジェブツンダンバ・ホトクトの努力によって，仏教がハルハ・モンゴルで発展しただけでなく，ジェブツンダンバ・ホトクト系統自体の地位，名義，影響力やその出自母体であるトシェート・ハン家の勢力も拡大しつつあった。この傾向にやがて乾隆帝が不安を抱くようになっていたところに，「チングンジャブの乱」が発生し，二世ジェブツダンバ・ホトクトがそれに巻き込まれたと疑われ，清朝側に不満が生じた。そのころ，清朝の全国的な情勢も大きく変わり，最大の敵ジュンガルに勝利をした時，二世ジェブツンダンバ・ホトクトが急死するという事態が起り，それをきっかけに乾隆帝が，ハルハ・モンゴル，ないしジェブツンダンバ・ホトクトに対する政策を大幅に調整することに乗り出した。

その一つは，即ち三世ジェブツダンバ・ホトクトのホビルガンをモンゴルではなく，チベットで転生すると規定したことである。ここで乾隆帝が，三世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをチベットで転生させるため，如何に干渉し，政治手腕を発揮したのかについて，岡洋樹［1992, p. 1-4］は，次のように述べた。

乾隆23（1758）年の夏，ハルハ・モンゴルの王公たちは庫倫で盟会を開き，亡き二世ホトクトの冥福を祈る「熬茶」のための使節をチベットに派遣することを決定した。使節には，親清派の王公サンザイドルジが，自分の叔父サンダクドルジと舅ハムブ・ラマ・シャグドルを任命した。この使節団は翌24年7月に庫倫を出発し，26年正月に帰還するが，ホビルガンについて何らの情報ももたらさなかったため，シャグドルを再度チベットに派遣したという。使節が，乾隆帝の指示で，北京に寄り，陛見した上，チベットに赴くようにした。しかし，シャグドルがチベットへの途上にある間に，乾隆帝が国師ジャンジャ・ホトクトを通じて，チベットのデモ・ホトクトに，東チベット・リタンの第巴ダンジングムヴの子をジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンであると上奏させ，三世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガン転生の全てが片付いていた。シャグドルたちはチベット到着の後，ホビルガンが転生したことに驚き，皇帝に報告したが，パンチェン・ラマやチョイジュン等も認定した以上，疑わしいところはないとこの問題に決着をつけた。一方，ハルハ・モンゴルには，同年10月12日，三世ホトクトのホビルガン発見が布告され，ホビルガンの候補になる児童が7人出現したが，すべて無視されたという[28]。

この見解に対して，以下のような分析を補充したい。ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンがモンゴルではなくチベットで転生するようになったのは，仏教本来の伝播や施主の要望によって行われたことではなく，清朝のハルハ・モンゴル，ジェブツンダンバ・ホトクトに対する政策の転換により強行されたものであった。それに対してハルハ・モンゴルの王公，とりわけトシェート・ハン家の王公，及びトシェート・ハン家の出自，もしく

はそれに近い高級ラマ，例えばエルデニ・シャンゾドバなどは根底からそれに反対し続け，ジェブツンダンバ・ホトクトが円寂するごとに，度々そのホビルガンを再びハルハ・モンゴルで転生させようと活動していた。

のち，三世ジェブツダンバ・ホトクトが円寂してから，ハルハ・モンゴルのトシェート・ハンは，四世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンを再度ハルハ・モンゴルへ転生させようと思い，妊娠した夫人の生まれる子に期待をしていたが，女の子が生まれたので，あきらめたと言う。この物語が，笑いの種，皮肉の材料として乾隆帝の『喇嘛説』[29] のなかに引用されることになったのはやむをえないが，ハルハ・モンゴル側がジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンを自分のところに生まれ変わらせようと動いていたことの証であると理解出来よう。清朝が四世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガン転生のことを，八世ダライ・ラマに委ねると，ダライ・ラマは自分の伯父の子，つまり従兄弟のロブサン・テブデン・ワンツォグをそのホビルガンに指名した[30]。

五世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンの転生は，清朝の金瓶掣籤制度[31] が導入された時期に当たり，チベットのラサで行われた金瓶掣籤によって転生したため，ハルハ・モンゴル側には何らの問題も行わなかったと思われる。

五世ジェブツンダンバ・ホトクトが円寂した折，エルデニ・シャンゾドバのナワンチョインピルは，六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをハルハ・モンゴルの地で転生させようと大胆な行動をとった。ナワンチョインピルが，いわゆるジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンがチベットで転生するという清朝の規定，慣例を承知していたにもかかわらず，六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンを再度ハルハ・モンゴルで転生させようと，計画，行動したのは，まさにこの問題をめぐる清朝とハルハ・モンゴル側の対立を背景としたものであった。その結果，ナワンチョインピルが免職されることによって，この問題をめぐる清朝とハルハ・モンゴルの対立は解消され，その後の七世・八世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンが転生する時，二度とそのホビルガンをハルハ・モンゴルで転生させとする挙動は見られなかった。

道光 24（1844）年 2 月 6 日，六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンがチベットで金瓶掣籤により転生した。しかし，筆者がすでに検討したように，ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンがチベットで転生することは，ハルハ・モンゴルの人々にとって大きな負担になっていた。三世以降，ジェブツンダンバ・ホトクトが円寂する度に，ハルハ・モンゴルの王公たちは何百人，ないし何千人も人を集め，大量の銀両を出してチベットへ行き，亡きホトクトのため，「熬茶」の布施をした。同時に，次期ホトクトのホビルガンの転生作業の準備に奔走しなくてはならなかった。モンゴルからチベットまでの道は遠く，かつ交通が不便，強盗が出没，水土気候に慣れず病気になるものも多かった。こうしてチベットとモンゴルの間の長距離を頻繁に旅することは，ハルハ・モンゴルの人々にとって，言い難い重い負担になり，中央政府への求心力に悪影響を与えていたといえよう。

むすびに

以上の検討により，五世ジェブツンダンバ・ホトクトの円寂後，ナワンチョインピルのとった大胆な行動の背景，経過，目的などが明らかになったと思うが，ここで述べてきた内容を短くまとめておこう。

4 年ほどエルデニ・シャンゾドバ職に在任したナワンチョインピルは，師匠の五世ジェブツンダンバ・ホトクトと共に活動していくなかで，清朝のジェブツンダンバ・ホトクトに対する冷遇，そして清朝国家の衰退に伴う官僚の腐敗などを自分の身で体験していた。そうしたなかで，師匠が青海の木魯烏蘇で円寂すると，罪に問われることを知りながら，六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをハルハ・モンゴルで転生させる計画を企て，実施し，清朝に強い抵抗の姿勢を見せた。そこまでしたのは，エルデニ・シャンゾドバとして，ジェブツンダンバ・ホトクトの代表の役を担っていたからである。ナワンチョインピルが，木魯烏蘇の地で計画を企てた時点で，倫辦事大臣は，まだホビルガン選出の使者達ラマ，ロブサンツルテムをチベットへ派遣していなかった。その後，派遣がなされた時，北帰の途上にあったナワンチョインピルは，当然それを知るはずもなかった。そうしたなか，木魯烏蘇であいまいに違法な計画を企て，実施に踏み出したとすれば，道光 22 年正月 18 日，師匠の遺骨を運んで庫倫に帰った後，達ラマ，ロブサンツルテムのチベット派遣のことを知り，計画の実行を中止する余裕が充分あったと考えられる。にもかかわらずナワンチョインピルは，計画の実施を中止しなかった。

ナワンチョインピルは，伊喜格勒克が持ち帰った情報に基づき，ドルジ，ツェレンドルジ，ロブサンダワらと一緒に連名の手紙を書き，ハルハ・モンゴル王公のみなの力でジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンを再びハルハ・モンゴルで転生させることを実現しようとしたのである。秘密であった計画がついに公開行動の段階へと移ると，清朝よりの立場にあるウリヤスタイ参賛大臣は，彼の行動を皇帝に報告し，何らかの措置を講じないと不測の事態を招く恐れがあると危惧した。報告を受けた皇帝が直ちに取り調べる命令を下すと，庫倫辦事大臣デルグドルジは，ナワンチョインピルらの身柄を拘束し，

訊問した。ナワンチョインピルが計画を企て，実施した際の真相がその供述により明白になり，彼はエルデニ・シャンゾドバ職を免職された。

ナワンチョインピルの免職により，ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンの転生地をめぐる清朝とハルハ・モンゴルの対立は少なくとも表面的には解消され，その後，ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをハルハ・モンゴルで転生させる行動は二度と見られなかった。しかし，清朝とハルハ・モンゴル側の対立がそれですべて解決されたわけではない。つとに筆者が検討したようにジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガン転生の金瓶掣籤は，ハルハ・モンゴルの人々にとって財政的に過重な負担となっていて，彼らの中央政府への求心力に悪い影響を与えていた。また，六世ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンが坐牀する前に，ナワンチョインピルの代わりにエルデニ・シャンゾドバとして就任したロブサンツルデムと他王公たちが，ジェブツンダンバ・ホトクトの「ホトクト」を「ラマ」に改称する請願を提出し，さらに清朝と対立し続けた（この問題に関しては別稿にて検討する予定である）。このように，ホビルガンの転生地に対する清朝とハルハ・モンゴル側の対立は，政治，財政問題のさまざまな形であらわれていたといえよう。

【参考文献】

史料

『乾隆御筆喇嘛説』拓版単行本，雍和宮編集委員会編集，国撮影芸術出版社，1998 年。

「五世ジェブツンダンバ・ホトクトの霊柩が庫倫に運ばれた件に関する庫倫辦事大臣デルゲドルジの奏摺」，档案番号 4231-018/211-（0117-0122）（『清代邊疆満文档案目録』）。

「鳥里雅蘇台参賛大臣ツェレンドルジがエルデニ・シャンゾドバの行為を告発した奏摺」，档案番号 4242-08/211-（2730-2732）（『清代邊疆満文档案目録』）。

「ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをハルハで尋訪しようとしたシャンゾドバの行動を取り調べた庫倫辦事大臣デルゲドルジの奏摺」，档案番号 4245-52/212-（117-123）（『清代邊疆満文档案目録』）。

包銀海 2006『ジェブツンダンバ伝』』民族出版社，p. 27-29。

呉豊培 1994『清代藏事奏牘』上，中国藏学出版社，p. 190-191 頁，「哲卜尊丹巴呼圖克圖圓寂摺」。

妙丹 1993『蒙蔵佛教史』江蘇広陵古籍刻印社。

『エルデニイン・エルヘ』影印本：Galdan tusala・či, *erdeni-yin erike kemeku teuke bolai*, Transcription by J. Gerelbadrakh, Edited by Yo. Janchiv. Monumenta historica mongolorum Tomus III, Fasciculus 1, Ulaanbaatar, 2007。

日本語

石濱裕美子 2001『チベット仏教世界の歴史的研究』東方書店。

岡洋樹　1988「乾隆期中葉における清朝のハルハ支配強化とサンザイドルジ」『東洋学報』第 69 編 3・4 号，pp. 173-194。

同　1992a「第三代ジェヴツンダムバ・ホトクトの転生と乾隆帝の対ハルハ政策」『東方学』第 83 輯，pp. 95-108。

同　1992b「「庫倫辦事大臣」に関する一考察」『神田信夫先生古稀記念論集・清朝と東アジア』山川出版社，pp. 197-214。

同　1994「清朝国家の性格とモンゴル王公」『史滴』（早稲田大学東洋史懇話会）第 16 号，pp. 54-58。

同　2003「東北アジア地域史と清朝の帝国統治」『歴史評論』2003 年 10 月号，（No. 642），pp. 50-59。

同　2007『清代モンゴル盟旗制度の研究』東方書店。

片岡一忠　1991『清朝新疆統治研究』雄山閣。

島田正郎　1982『清朝蒙古例の研究』東洋法史論集第五，創文社。

田村実造　「清朝の蒙古統治政策」『異民族の支那統治政策―清朝の辺境統治政策』，至文堂，pp. 13-97。

萩原守　2006『清代モンゴルの裁判と裁判文書』，創文社。

橋本光宝　1942『蒙古の喇嘛教』仏教公論社。

八宝　2010「五世ジェブツンダンバ・ホトクトと理藩院官吏の争い」『日本モンゴル学会紀要』40。

平野聡　2004『清帝国とチベット問題―多民族統合の成立と瓦解』名古屋大学出版会。

ポズドネェフ著・東亜同文會翻訳 1908『蒙古及蒙古人』東亜同文會発行，明治 41 年。

宮脇淳子　1993「ジェブツンダンバ一世伝説の成立」『東洋学報』74 巻，3・4，pp. 157-189。

森川哲雄　1985「外モンゴルのロシア帰属運動と第二代ジェプツンダムバ・ホトクト」『歴史学・地理学年報』第 9 号，pp. 1-40。

矢野仁一　1937「清朝の対蒙政策論」『地友会雑誌』第 2 巻第 5 号，pp. 1-12。

山口端鳳　1977「活仏について」（玉城康四郎博士還暦記念論集）『佛の研究』春秋社，pp. 285-302。

中国文

八宝　2008「金瓶掣簽制度與六世哲布尊丹巴的轉世」中國蒙古學第二屆國際學術研討會上で発表，同研討會論文集に収録予定。

成崇德　1986「論哲布尊丹巴活佛系統的形成」『西蔵研究』第 2 期。

岡田英弘　1989「哲布尊丹巴傳記資料五種」『蒙古學資料與情報』1989 年第 2 期。

金成修　2006『明清之際藏傳佛教在蒙古地区的傳播』社会科学文献出版社。

金梁　1994『雍和宮志略』中国蔵学出版社。

李毓澍　1962『外蒙政教制度考』「喇嘛教在外蒙古的発展和地位」台湾中央研究院近代史研究所。

馬大正・成崇德 1990『清代蒙古高僧傳譯輯』全国図書館文献縮微複製中心出版。

妙丹　1993『蒙蔵佛教史』江蘇広陵古籍刻印社，第五篇。

斎木道爾吉 1994「外喀爾喀車臣汗碩　的両封信及其流傳」『内蒙古大学学報』（哲学社会科学版）。

袁森坡　1996「清朝治理蒙藏方略」『中國邊疆史地研究』1996 年第 4 期。

札奇斯欽　1978『蒙古與西藏歷史關系之研究』国立政治大学出版社，中華民国 67 年。

張羽新　2002『清朝治藏典章研究』（中）中国藏学出版社。

趙相壁　1988「簡論第二世哲布尊丹巴呼圖克圖」『内蒙古社会科学』第 2 期。

趙雲田　1989『清代蒙古政教制度』中華書局出版。

【注】

1．八宝 2010，p. 49。

2．包銀海 2006，p. 29。

3．妙丹 1993 第五篇，pp. 1-77 によると，一世は，慶寧寺，二世は勅愿寺，三世は甘丹寺，四世は慶寧寺，そして五世は甘丹寺，六世は丹巴多爾濟寺，七世は甘丹寺に安置された。八世について記

していない。
4．呉豊培 1994,「哲卜尊丹巴呼圖克圖圓寂摺」。
5．包銀海 2006, pp. 29-30。
6．「五世ジェブツンダンバ・ホトクトの霊柩が庫倫に運ばれた件に関する庫倫辦事大臣デルゲドルジの奏摺」。
7．包銀海 2006, p. 126。
8．八宝 2010, p. 。
9．『清宣宗実録』巻 330，17 葉裏，道光 20 年正月己酉（18 日）条。
10. シャンゾドバ（šanjudba 商卓特巴）は，チベット語である。清朝は，1723 年に，エルデニ・シャンゾドバと改称し，寺院の行政やシャビナル（šabinar 沙畢納尔，属民）を管理する長官としてジェブツンダンバ・ホトクトのもとに設置した。エルデニ（erdeni 額尔徳尼）は，「宝」の意味。チベット語の rin-po-che と同じ。
11. 札奇斯欽 1978, p. 698。
12. 橋本光宝 1942, p. 117。一世ジェブツンダンバ・ホトクト（1635-1723）の法名はロブサン・ワンブ・ジャルツアン（羅布藏旺布札勒三，善慧因陀羅王の意）。
13.『エルデニイン・エルヘ』影印本，f.134.a，p. 564。
14. 札奇斯欽 1978, p. 698。
15. 庫倫辦事大臣職の設置，その掌中について詳細は，岡洋樹 1992b に参照。
16. 札奇斯欽 1978, p. 667。
17. ポズドネエフ 1908, pp. 124-125。
18. ポズドネエフ 1908, pp. 635-636。
19.『大清會典事例』巻 974,「理藩院・喇嘛封號」p. 1084 下。
20. ポズドネエフ 1908, pp. 635-636。
21. 李毓澍1962, pp. 388-389。
22. 趙雲田 1990, pp. 367-368。
23.「五世ジェブツンダンバ・ホトクトの霊柩が庫倫に運ばれた件に関する庫倫辦事大臣デルゲドルジの奏摺」。
24.「烏里雅蘇台参賛大臣ツェレンドルジがエルデニ・シャンゾドバの行為を告発した奏摺」。
25.『清宣宗実録』巻 385，21 葉裏と 22 葉表，道光 22 年 11 月辛未（27 日）条。
26.「ジェブツンダンバ・ホトクトのホビルガンをハルハで尋訪しようとしたシャンゾドバの行動を取り調べた庫倫辦事大臣デルゲドルジの奏摺」，档案番号は 4245-52/212-（117-123）。
27. 一般に，ジェブツンダンバ・ホトクトの世代の数え方は二つある。一つは，ハルハ・モンゴルで転生してからの数え方，つまり 1635 年，トシェート・ハン家に転生したホビルガンを一世ジェブツンダンバ・ホトクトと称し，その後モンゴル・チベットで八世まで転生した。もう一つは，インド・チベットで転生していたからの数え方，つまり初代ホビルガンは，インドで釋迦穆尼の時にその転生が現れ，以来インド・チベットで計 15 世代転生した。『エルデニイン・エルヘ』影印本，f.131.a-f.132.a，pp. 554-556 によると，前四世，一二世，一四世はインドで，五世から一一世，一五世はチベットで転生した。この数え方からすると，ハルハ・モンゴルで転生した一世ジェブツンダンバ・ホトクトは，16 世ジェブツンダンバ・ホトクトに当たり，その次はこれに準じて類推することもある。
28. 岡洋樹 1992, pp. 1-4。
29. 乾隆帝の『喇嘛説』。
30. 妙丹 1993 第五篇。
31. 乾隆 58（1793）年に，導入したホトクトの新制度である。『欽定藏内善後章程二十九条』の第一条として配布することによって実施された。清朝は，同じ二本の金瓶を作り，一本をチベットへ送り，ラサの大昭寺に置き，ダライ・ラマやパンチェン・エルデニなどチベット地域のホトクトの転生に使い，もう一本を北京の雍和宮に置き，モンゴルと青海，甘粛地域のホトクトの転生に使った。金瓶は，壷の形をしていて，本体が銅製鎏金，上に宝石が象眼されたチベットの伝統的な工芸品の特徴を持つ，優雅なものであった。理藩院に登録されたすべてのホトクトのホビルガンが転生する際，マンジュ文，漢文，チベット文三種類の文字で「霊童」（ホビルガンの候補者に選ばれた子）の名前を牙簽牌（こはぜ，すなわち帙のこと，象牙または骨製の小片）に書き込み，金瓶のなかにいれ，高僧らが念経後，駐蔵大臣が掣籤し，的中した者がホビルガンの転生者になるのである。駐蔵大臣は，ホビルガンの転生者を皇帝に上奏し，認定の手続きをする。あとは，吉日を選びホビルガンが坐牀すれば転生の過程が完成する。

The Death of the Fifth Jebtsundamba and the Activities of Erdeni Shangjudba

Babao

No existing research has touched on the death of the fifth Jebtsundamba Khutughtu, and the activities of Erdeni Shangjudba Nawangchompil, especially his adventurous attempts to make the sixth Jebtsundamba reincarnated among the Halh. Using the Manchu archives of the Qing Grand Council at the No. 1 Historical Archive of China, this paper discusses the background, process, and purpose of the adventurous activities of Erdeni Shangjudba Nawangchompil, who attempted to make the sixth Jebtsundamba Khutughtu reborn among the Halh, with full knowledge of the Qing rules, and at great personal risk. It aims to clarify the historical process of the longstanding opposition between the Qing court and the Halh over the place of rebirth of the Jebtsundamba Khutughtu.

Keyword：pass awdy, Nawangchompil, embodiment, the place of rebirth, the adventurous activities